

友達皆、合格し、喜んでる中を、
恐る恐る見に行く僕。

足が重くて、前へなかなか進まない。

すると、前方に、もやの中にあの子が現れる。
あの子が笑っている。

思わず僕は頭に手をかける。
毛がある！

「ああ、よかった！」

「うかった！」

わいわいする人ゴミの中で、
あの子がじっと僕を見つめている。

その時だった。

「よっちゃん、いるか。」

大手筋へ行くから、

ついでに何か買ってきたろうか。」

と、おばあちゃんの声がした。

僕は、はっと、目が覚めた。

「うん、チョコレート二枚、お願いや。」と、
とっさに、僕は起き上がり、ドアを開けた。

そして、昨日、お母ちゃんからもらった百円を
机から出して、おばあちゃんに渡した。

他人のものはそうは行かない